
インフィニティ

風雅銀露

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニティ

【Nコード】

N0580Y

【作者名】

風雅銀露

【あらすじ】

無限に存在する世界。『四天王』と呼ばれ、世界を救っていった救世主が四人いた。四人は仲が良く、互いをフォローし、世界を救う使命に奔走していた。だが、一人の少年が様々な裏を知ってしまった、巻き込まれることで遂には神々を裏切る。これにより黄金世代と言われた『四天王の伝説』が崩壊する。裏切った少年は神々と仲間と決別し、たった一人で無限の世界を旅する。

プロローグ

（聖界・上層・平原）

辺り一面が灼熱の炎の海となっていた。

火の海の中には右手に赤と黒の長剣を持ち、左目を包帯で巻いた少年がたった一人、血まみれで立っており、足元には数十人の人の残骸が転がっていた。

少年自身には傷一つなく、全身に付着している血はすべて返り血だった。

「火澄！！」

少年――『皇 火澄』は、自分を呼ぶ声がした方に振り返ると、幼馴染で自分と同じ四天王と呼ばれた『草薙 拓斗』『草薙 沙耶』『東郷 雪姫』の三人が後ろに兵を引き連れているのを確認した。後ろに控えている兵たちも見たことがある。四天王直属の私兵たちだ。火澄の直属の兵たちの姿もある。

「……拓斗、沙耶、雪姫……か」

「火澄、ここで何しているんだ？」

「見てわからないのか？ 俺の敵を殺しているんだよ」

拓斗の問いに当然のように答える火澄。

沙耶と雪姫の二人が息を飲むのが見えたが、火澄は全く関心を示さない。むしろ、二人の反応に首を傾げた。

「今更何を驚いている。俺がすでに人を殺していることなんざ、承知の事実だろ？」

「でも、どうして仲間を殺したりしたの?!」

沙耶の叫びに火澄は怒りを感じた。

“仲間”……本当にそうなら、俺を使って人体実験なんかしない。拓斗や沙耶、雪姫を実験のモルモット候補になんかしない。こいつらは……こいつらは人の皮を被ったケモノにすぎない。狂ったケモノだ。

心の中で叫ぶ火澄だが、それを口にはしない。拓斗たちは知らなくていい、知らなくていい、とそう思っているからだ。

だから、火澄は心をあえて殺す。殺し、残酷な真実を告げる。

「仲間……か。聞こえなかったのか？　俺は、俺の敵を殺したただけだ、と」

「火澄……」

「火澄さん……」

「火澄、お前……」

沙耶と雪姫が涙目になり、拓斗が怒りをあらわにする。

火澄の直属の兵たちからも失望と怒りの表情が、火澄の目から見ても明らかだ。

だが、ここまで来て引くことも火澄にはできない。

「レーヴァテイン」

火澄は拓斗たちが行動を起こすよりも早く、手に持っている長剣を振り上げて手の中で回転させ、地面に剣を突き刺した。

レーヴァテインがほんの一瞬だけ、地面に突き刺さる瞬間光るとそこを中心に大地が四方に割れ、地割れの裂け目から山吹色の炎が吹き上がる。

「【ボルケーノ・ウォール】」

「なっ！ 【光の障壁】」

火澄が広域型の魔法を発動させ、拓斗たちを襲う。拓斗が間一髪のところまで防御することに成功したが、吹き上がる炎で視界が覆い尽くされ、火澄の姿を見失ってしまう。

火澄はこれを好機とし、その場を離れる。

「さよなら」

もう二度と、この場所には戻らない。そう、覚悟して起こした今回の行動に公開も反省もない——ただ、少しでも拓斗たちのことを考えたが、すぐに振り払った——火澄は聖界から逃げ出す形で無限に存在する世界の一つに転移する。

第1話 「入りたくねえ……。行きたくねえ……」

聖界から逃亡し、この世界に転移して六歳の姿になった火澄は、
たまたま仕事をしていた伊達正雲に拾われて九年の月日が流れてい
た。

「あゝ、メンドイなあ」

現在、火澄は保護者になってくれている正雲に呼び出され、彼が
学園長を務めている学園にバスに揺られながら向かっていた。

『伊達正雲』。この世界で罪を犯した魔法使い達を取り締まる『
魔法士』の中でも最強と言われている現役一級魔導士であり、魔法
士を育成する学校『清秋学園』の学園長をも兼任している男性だ。
魔法士を目指す者達からは憧れの対象。魔法士として一流でバケモ
ノじみた実力を持っており、また教育者として厳格かつ公正で身体
で覚えること一番経験になるという考えから指導は実践的で厳しい
が、身内には細かいことを気にしない豪快で冗談や軽口も良く叩く
姿も見せている。決めるときはびしっと決める人だ。

ただ、火澄本人は行きたくないというのが本音だ。正雲からの呼
び出し、彼の世話になつてきた経験上から面倒事に巻き込まれるの
が目に見えているからだ。育ててくれていることには感謝している
が、こればかりは勘弁してほしかった。だが、行かなければなら
ない。行かなければ後々、さらに面倒事を吹っ掛けられるからだ。

などと思考にふけっていると清秋学園がある清秋市の中央区に入
った。ため息を吐き、諦めモードに入った火澄はバスから降りるた
めにボタンを押し、バスが学園前のバス停に停車すると清秋市中央
区に降り立った。

目の前には清秋学園。敷地に入らず、その場に佇む火澄。

「入りたくねえ……。行きたくねえ……。面倒事の予感が俺の直観に響いてる」

だが、何度も言うように行かなければさらなる面倒事が待ち構えているだけに火澄に選択肢はない。

ため息を再び吐き、重々しく一步を踏み出そうとした時――。

「イヤアアアアアア!!」

「お?」

悲鳴が聞こえてきた。

声の大きさからしてさほど遠くない。

少しでも面倒事が遠ざかれば、理由としては不純極まりないが火澄は声のする方に走り出した。

西区の住宅街。中央区と西区の境目のこの辺りと思って注意を向けると裏路地に男が数人固まっているのを発見した。魔力を感じて足元に視線を落とすと魔法陣が男達を囲むように展開されていた。

「（女の子の悲鳴が聞こえたから流れ的にこの陣は魔力無効化か。強姦かよ）」

自分の中で予想を自己完結した火澄は気配を殺して男達が何をし

ているのか後ろから覗くと、服が切り裂かれ胸などが露出した黒髪の女の子が、男達に押さえつけられているのを見た。

自分の予想が見事に的中。火澄は何も言わず、気配を殺したまま目の前の男の股間を手加減なしの問答無用で蹴り上げた。

——ブチッ

「○ ■ ▲ □ ● ! ? ! ?」

何かが潰れる音と共に声にならない悲鳴を上げる強姦魔の男その一。

「なんだてめバフッ！」

「強姦魔のクズと話すことなんかないんでね」

仲間の悲鳴に反応した強姦魔の男その二を殴り飛ばし、壁に叩きつける。

仲間がやられたことで応戦しようとしたのだろう。魔法をしようとした強姦魔が数人いたが、魔法が発動しないことに焦りを見せていた。それを見て火澄は鼻で笑う。

魔力無効化の魔法陣は、陣内いるすべての魔力を無効化する。つまり、無差別。敵も味方も自分自身にも効果を及ぼすのだ。

そのことを知らない男達が馬鹿らしく、火澄は淡々と殴り飛ばしていく。火澄からすれば魔力が使えなくても全く問題ない。むしろ接近戦、体術が火澄の独壇場だ。

瞬く間に強姦魔の一味を地面に沈め、右手に山吹色の炎を灯す。

「邪魔だな」

地面に炎を放つと足元の魔法陣の一部を破壊する。すると魔法陣が効果を失い、消滅する。火澄は魔力を解放し、左手を女の子に向ける。何かされると思ったのか、女の子は身を固くした。

「【時流反転】」

女の子の体が光に包まれ、光が消えると切り裂かれていた衣服が元に戻っていた。さも、ありえない光景を目の当たりにしたように女の子の顔が驚きに染まっていた。

「これでよし。大丈夫か？」

「え、ええ」

とりあえず未遂で済んだようでホッとした火澄だが、声をかけたら自分の体を隠すようにして視線を逸らした女の子を見て複雑な心境になった。男に無理やり犯されそうになった女の子の心の傷は男の火澄には計り知れないものがあつた。

今まで色々な世界を巡ってこのような状況に数回当たったこともあつたが、その時は幼なじみの天然女たらし朴念仁とその妹と体の弱い子の三人が担当していたので、直接火澄は関わったことがなかったのどうしたらいいのかわからなかった。

何を言えいいのかもわからず、あの天然女たらし朴念仁のマネをするわけにもいかず、気まずい沈黙が火澄と女の子の間で流れていた。

「ぐっ……この、餓鬼が……！」

振り返ると殴り倒した強姦魔の一味が数人起き上がってきた。魔法陣を破壊したことで、普通に全員から魔力が放たれていた。最初に股間を潰した奴と殴り飛ばした奴は起き上がってくるどころか、ピクリとも動いていなかった。

一味の一人が拳大の火球を手の平に作り出していつでも放射できるようにしていた。

火澄はそれを見ても慌てることはしない。女の子を背に隠すようにして前に出る。

「で？ そんな火でどうにかなると思ってんのか？」

「口のきき方に気をつけな、チビ。兄貴は『炎帝』と呼ばれるほどの火属性の使い手なんだ。怒らせない方が身の為だぜ。ま、もう無駄だな」

チビという単語に青筋を立てる火澄だが、一応我慢して皮肉たっぷりに現実を突きつけた。

「ほお。その『炎帝』様が、こんな昼のど真ん中に女の子を数人ばかりで強姦するなんていいご身分だな。大層な二つ名持つてるくせ

にやることはクズ同然。さつさと二つ名返上したらどうだ？」

「この餓鬼、どうやら死にたいようだな！ 【ファイア・ボール】」

火澄の言葉が頭に來たのだろう。逆上し、火球を放ってくる。青筋を立てたまま火澄は口元を釣り上げる。

「未熟なんだよ！」

火澄に当たる瞬間、火球が空中に止まる。赤色の火球が山吹色に変わっていく。

「なっ!？」

一味の男達が、目の前の光景に啞然とする。火澄の後ろにいる女の子も信じられないものを見る目で目の前の光景を見ていた。

兄貴と言われた男が手を何度も振るが、火球はなんの反応も示さない。完全に魔法の支配権が変わっていた。

一同が混乱している中ただ一人、火澄だけが正常な思考をしていた。というより、この場合は混乱している方が正しい反応だろう。

魔法の支配権が変わることは本来ならあり得ないことだ。

そのまま混乱の中にいることはなかった。支配権が変わった火球が球体を中心に新たに輪を作りながらとんでもない熱を発し、一同を混乱の中から引き戻したのだ。

「お前らの行先は、豚箱だ」

それはもう真っ黒な笑みを浮かべた火澄は、支配権を塗り替えた火球を一味に向けて射出する。

一味の男達数人が数人で障壁を張るが、火澄の火球はそれらをまるで何もなかったように破壊すると男達に当たる瞬間に炸裂し、男達を飲み込む。

悲鳴を上げる暇も与えず男達を真っ黒に焦がし、完全に気絶させる。

「強姦魔一味、ご招待」

静まり返る裏路地に火澄のやることはやったという声だけが流れた。

第1話 「入りたくねえ……。行きたくねえ……。」 (後書き)

誤字脱字ありましたら報告をお願いします。

第2話 「開けなきゃダメか？」

強姦魔一味を炎の縄で縛り上げ、女の子の悲鳴を聞いて近所の住人が通報して駆けつけてきた魔法士に引渡し、事情聴取を受けてから現在、火澄は――女の子を送るつもりでそれを提案したら女の子も同意してくれたので――女の子と二人で中央区に向かって歩いていた。

ただ、気まずい沈黙が二人の間に流れていた。

「（さうて、どうすっかな。話す内容なんかないしな）」

「（助けてくれたことに感謝はしてる。けど、この子に……胸や肌を見られたのよね……。年下といっても男の子に見られたことなんてないから、恥ずかしい……）」

女の子はすでに先ほどのことはもうなかったことにし、記憶を奥底に封印していた。火澄は火澄でどう話を切り出せばいいのかわからずに頭を悩ませていた。

そこで火澄はある大事なことに気づき、女の子に話しかけた。

「ところでさ」

「な、なにかしら？」

「適当に歩いているんだけど、どこに送ればいいんだ？」

「あ、このまま進んでくれるかしら？ 清秋学園が行き先だから」

「入学式は数日先だった気がするけど？」

「ええ。よく知ってるわね。そうよ。入学式はまだ先なんだけど、学園長の伊達正雲さんから今日学園に来るようにと通知が来ていた

の」

質問に対する女の子の答えを聞いた瞬間、火澄の直感が面倒事の予感の鐘をバスに揺られていた時よりも大きく鳴らしていた。諦めていたはずなのだが、もう火澄は考えることすら諦めた。

「はぁ……」

「どうしたの？」

「気にすんな。諦めが最大にまで達しただけだから」

「そ、そう。それと、助けてくれてありがとう。私は篠宮雅よ」

「皇火澄だ。ちなみにこんな身長だが、話の流れから雅、お前と同じ年だ」

雅が固まる。完全に火澄を年下と思っていたのだろう。現在雅の身長は百五十五センチで火澄の身長は百五十センチ。

雅の周りの男性は身長が高い人が多かったのだろう。そのため、自分と同じ年以上の男性は自分より身長が高いという一種の偏見が出来る上がつていた。それが、自分と同じ年でも自分より身長が低い男性がいるというのを知らなかった現実に思考が追い付いていなかった。

覚悟はしていたが、雅の反応にショックを隠せずに火澄の周囲に暗い気配が漂い始めた。足取りもトボトボと重いものになっっていた。

「す、皇……？」

あまりの暗さに雅が思考の混乱から戻ってきた。

「……ええ、ええ。どうせ、俺はチビですよ。一度も年相応に見られたことなかねえよ。わかってたさ……どうせ、どうせ……」
「ええと……」

戻ってきたのはよかったが、あまりの火澄の暗さに今度は雅がなんて声をかけていいかわからなくなっていた。

トボトボと歩く火澄とその後ろを歩く雅は、数分で清秋学園の学園長室前まで来ていた。ただ、いまだ火澄のテンションは低いままだった。

雅が原因ではない。この目の前の扉を開けるのが嫌なだけだった。

「開けないの？」

後ろにいる雅が聞いてくる。

「開けなきゃダメか？」

「貴方も呼ばれているなら、開けるのが筋じゃなしかしら？」

正論を言われた。これではもう目の前の扉を開けるしかない。

もう何度目かになる諦めに達した火澄は目の前の扉を一応礼儀としてノックしてから開けた。

その瞬間、視界いっぱいには自分の育て親の顔が映ったので反射的に右拳が出てその面に叩きこもうとしたが、避けられた。逆に伸びた右腕を相手に掴まれる。そのまま腕を引かれ、お返しとばかりの拳が顔面めがけて飛んでくるがその拳を左手で掴み、そのまま力比べのごとく互いに一歩も引かずに掴み合う。

「オッサン。いきなりなご挨拶だな」

「お前もな、火澄」

火澄と正雲は軽口を叩きながらも力を緩めない。それどころか、どんどん力を込めていくので両者の腕の筋肉がぴったりと上着に張り付き、窮屈そうに押し上げていた。

雅はいきなりな展開に付いてこれずに入り口で固まっていた。

「女連れで来るとは、やるようになったな」

「アホか。来る途中でたまたま会っただけだったの」

「ふ……そうか」

火澄は全部話す必要がなかったのであえて短く説明したが、何が

あつたのかわかっているような笑みを浮かべる正雲を見て内心でため息をついた。

それと同時に深くまで言ってこない正雲にの心遣いに称賛の念も感じた。……が、まだ組み合つたままなので火澄はもちろん正雲も力を緩めていない。

「止めにしね？ 周りが付いて来れてないし」
「そうだな」

火澄の提案に随分とあつさり乗る正雲。

掴んでいた手をお互いに離し、正雲は部屋の中央にある椅子に座ると火澄はその前に立つと周りにいた雅を含めた女の子たちもハツとして現実に戻ってきた。だが、火澄は彼女たちを無視して正雲に問いかけた。

「で？ 俺に何の用だ？ ここにいる女の子たちは？」
「ここにいるのは皆、魔法士の卵だ。一人だけ第三級魔法士がいるがな。お前を呼んだのはこの子たちのお守りを頼みたい」
「断る。帰る」

予感的中。

火澄は面倒事と分かつた瞬間に即答し、踵を返した。

「まあ待て、火澄」

だが、相手は世界最強と言われている第一級魔法士の伊達正雲。
火澄の手を素早く掴み、行く手を阻む。

「ちっ」

舌打ち。

火澄からすれば、正雲の頼み事は今何もなくとも後々厄介ことになる可能性が極めて高いのでこころで退散したかったのだが、そうさせてはくれなかった。

「美少女のお守りだぞ。男なら喜んでやれ」

「面倒になるから断る」

「お前は女の子だけに戦場に立たせるのか？」

「魔法士として歩むんならそれくらいの覚悟はできてんだろ？ 戦場に男も女も関係ない」

「まだ、新人の子たちがほとんどだぞ？」

「最初は誰もが通る道だ。そこから経験を積んで一人前になっていくのが普通だろ？ それにそれを教え、導くのがあんなら教職者の仕事だろうが」

火澄も正雲もお互いに譲らず、平行線が続く。

変な空気が学園室を包み込み、周囲の女の子たちが微妙な表情を浮かべていた。

「学園長。そろそろ、お話を進めていただけませんか？」

痺れを切らしたのか、ただ一人学園の制服に身を包んだ少女が入ってきた。

彼女がこの中にいるただ一人の第三級魔法士だろうと容易に推測できたが、火澄からすれば今は興味もない。

「糸川、もう少し待ってくれ。今このアホを説得するから」
「説得も何もやる気はねえよ」

もう少し、この平行線は続きそうだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0580y/>

インフィニティ

2011年11月28日10時51分発行